



武州工業株式会社 DX戦略2025

2025.03.18改定

武州工業株式会社
代表取締役社長 林 英徳



私たち武州工業は、1951年に東京都青梅市で創業し、パイプ曲げや板金加工を基盤とした部品製造業を展開してきました。バブル崩壊後、他の工場がコスト削減のために海外へ移転する中、私たちは国内での生き残りをかけて早期にIT化や働き方改革を進めました。現在、青梅には2つの拠点があり、パイプ加工や板金加工に加えて、寸法測定、治具設計やAI開発など、幅広くお客様のニーズに応えています。

当社は外部環境の変化に直面しており、グローバル化による低価格の海外部品との競争が激化し、原材料やエネルギー価格の上昇、人手不足、環境への配慮などの影響を受けています。また、AIやIoT、VR、ロボット技術などデジタル技術の急速な発展もあり、これらの技術にどう対応していくかが重要な課題となっています。

このような状況下で、地域雇用を守りながら武州工業の競争力を維持するためには、デジタル技術やデータの活用をさらに深化し、自社独自の技術を強化する優れたDX戦略が必要と考えており、「GKC（現場改善会計）」を学術機関と共に推進しています。

武州工業は、目指すビジョンを『**モノづくりで社会の課題に挑戦し続ける企業**』として、高いハードルに挑戦し続けます。

人の活動が続く限り、課題は常に存在します。その解決のためのモノづくりは社会から必要とされています。私たちはこれまで培った「**良い設計、良い流れ**」のノウハウを活かし、『**誰もやっていないことを具現化する**』ことを「武州テック」と名付け、全社員で実現を目指しています。武州工業のノウハウを必要とする企業やビジョンに共感する方々と共に、モノづくりを通じて社会の課題を解決していきたいと考えています。

代表取締役社長 林 英徳



【ミッション】

環境・地球・人に優しい300年続くモノづくりの会社

- 私たちは、モノづくりという武州工業のDNAを大切にしながら、将来を見据えて世の中の課題をE（環境）S（社会）G（ガバナンス）の3つの面で解決する「環境・地球・人に優しい300年続くモノづくりの会社である」ことを目指します。

【ビジョン】

モノづくりで世の中の課題にチャレンジし続けて、価値を創出する会社として持続的な成長をめざします。

これまで武州工業がつちかってきたモノづくりの技術、人材、しくみ、システム開発技術をフルに活用して、お客様のお悩みを「よい設計、よい流れ」で解決する「武州テック」事業を推進し、誰もやっていない事を具現化し、社会に貢献してまいります。

- 「武州テック」事業は、お客様企業のお悩みや課題をお聞きし、整理整頓したうえで、武州工業のモノづくり・ノウハウ・システムを駆使して全体最適の解決を提供するサービスのことです。これらの実績や知見をデータベース化し、スピーディに対応できるように常にブラッシュアップしていきます。



武州工業は、経営ビジョン及びビジネスモデルを達成するために、パイプ加工技術やノウハウを基盤とし、AI、IoT、VR等のデジタル技術を駆使することにより、社会やお客様のお困りごとを、「よい設計、よい流れ」で解決する「武州テック」事業を推進します。お客様企業や社会のニーズに対応し、高い付加価値を生み出す日本のモノづくり企業として継続的に発展するために、以下のDX戦略を立案しました。

① 「よい設計、よい流れ」を核にすえたお客様サービス&製品の提供

お客様の受注、見積、契約、企画、設計・製造、納品、請求、運用までの一連の業務フローを「よい設計、よい流れ※」にデザインし直し、全社での情報共有、部門間連携及びデータ分析を進め、スピーディで高品質な製品及びサービスを提供します。

※「よい設計、よい流れ」とは、デザイン思考に基づいてデジタル機器を有効に活用して全体最適の視点で設計された仕事の仕方のことです。武州工業では「よい設計、よい流れ」のやり方で「一個流し生産」（セル生産方式）体制を構築し、スマホセンサーやIoT機器、クラウドを利用してリードタイムを短縮した少量多品種生産を実現しています。このノウハウを活かして、お客様企業に導入したIoT機器等から得られたデータ分析を実施し改善提案していくことが「よい設計、よい流れ」の考え方です。

よい設計、よい流れ

TIME IS MONEY: タイムスタンプの利用



リードタイム: 材料リードタイム
 生産リードタイム
 総合リードタイム等

➡ リードタイム短縮活動

【よい設計、よい流れ】で実現できること
 ・発注から納品までのリードタイムを短くし、過不足なく製造することで製品在庫を多く持たず、在庫管理にかかるコストを削減することができます。このノウハウを利用して他の業種にも応用が出来、支援をすることができます。



② GKC（現場改善会計）を用いた改善効果の可視化と管理指標の設定

事業の多角化が進む中で、まずは板金工程に**GKC（現場改善会計※1）**の導入を行い、製品や生産プロセスが異なる現場にも適用できる共通の管理指標を設定します。その後、他の工程にも展開し、武州工業全体に向けて独自の管理会計手法を構築し、現場改善を支援する方法を確立します。

また、BIMMS（※2）の基本理念である「タイムスタンプ情報」の利用を促進します。

※1 GKC（現場改善会計）について：製造現場の改善活動と会計情報を連携させ、コスト削減や生産性向上の効果を数値化・可視化する手法です。現場主導の経営判断を促進し、継続的な改善を支援する考え方です。（出典；上總・柊、2023.現場改善会計論）

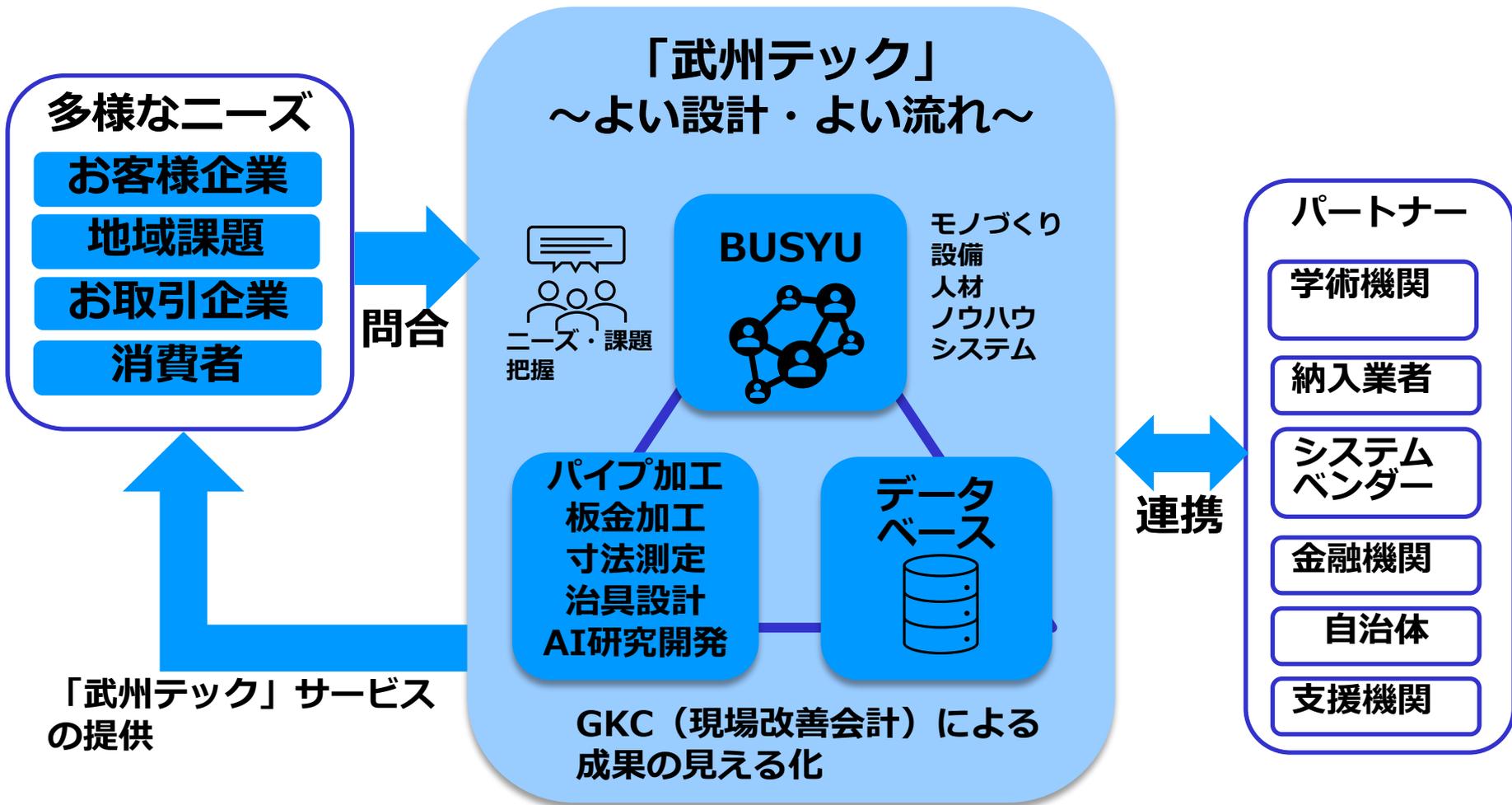
※2 「BIMMS」について：Busyu Intelligent Manufacturing Management Systemの略称で、武州工業独自の生産管理システムです。このBIMMSを導入することにより、現場の4M（人man：作業時間、設備machine：稼働状況、材料material：材料ロット、方法method：加工手順）をリアルタイムで把握し、「ムリムダムラ」を発見して改善を繰り返すことで生産性を向上させることができます。この「生産情報管理、生産情報管理システム及び生産方法」は「特願2020-077379」で特許査定が完了しています（2023.01.31）。

③ デジタル人材の育成

多様化する社会的な課題やデジタル技術の進展に対応できるデジタル人材を計画的に育成し、その知識を社内で共有します。

④ 外部システムとの連携

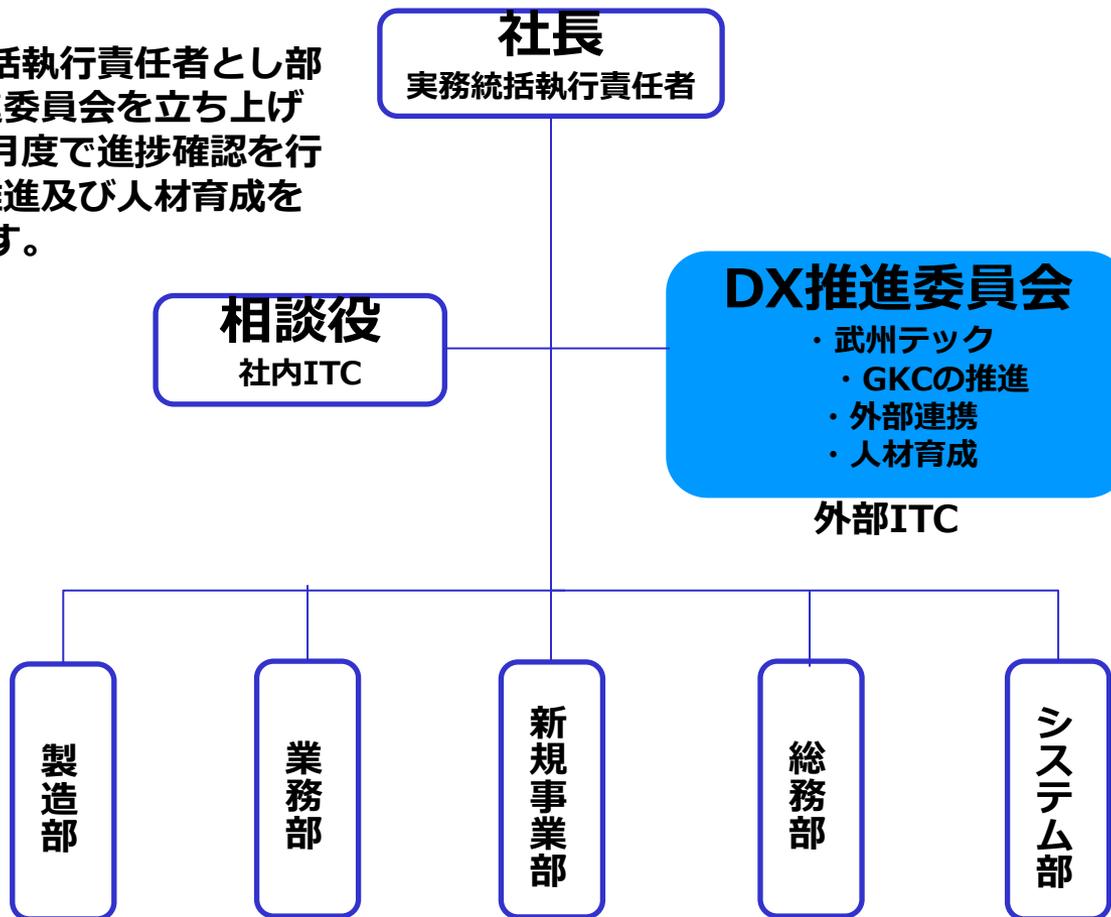
共通EDIなどを通じてお客様との情報共有を促進し、さらなる品質、コスト、納期の向上を目指します。





DX推進体制

■ 社長を実務統括執行責任者とし部門横断のDX推進委員会を立ち上げ各チームごとに月度で進捗確認を行いながら、DX推進及び人材育成を実践していきます。





武州工業は、経営ビジョン達成のために毎年売上の3%の投資を行い、以下のITシステム及びデジタル技術活用の環境整備を進めます。

①「武州テック」事業に利用するアプリ開発及びシステム・DB構築

お客様からの問合せを受付け、課題把握、企画提案、支援・納品、運用までの「武州テック」事業を行うために必要なアプリ開発及びシステム構築を行います。また、これらの実績やノウハウをデータベース化し、データ分析することによって武州テックの精度をスパイラルアップします。

②社内レガシーシステム環境の整備

既存で利用している自社業務管理システム(BIMMS)、受発注システム及び会計システムを見直したうえで連動し、情報共有や電子帳票に対応することにより社内業務の生産性向上を図ります。

③外部取引先との情報連携

セキュリティを担保しながら、外部取引先との情報共有するためのプラットフォームを構築しスムーズな製品・サービスの提供を目指します。

数値目標 (KPI)



DX戦略	実施項目	KPI	評価方法
①「よい設計、よい流れ」を核にすえたお客様サービス&製品の提供	<ul style="list-style-type: none"> 武州テック事業 アプリ開発 DB構築 	<ul style="list-style-type: none"> 2027年までに5件受注 2027年までに完了 2027年までに完了 	DX推進委員会内の武州テックチームによる月度会議で進捗評価を行い、改善する。
② GKC (現場改善会計) を用いた改善効果の可視化と管理指標の設定	<ul style="list-style-type: none"> GKC導入による改善効果の可視化 管理指標の設定 	<ul style="list-style-type: none"> 2027年：板金工程のGKCデータをBIで可視化完了 2027年：未利用生産能力※の20%向上 (2025年比) 	DX推進委員会内のGKCチームによる月度会議で進捗評価を行い、改善する。
③デジタル人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> 武州カレッジの受講 武州DX教育 デジタル人材の育成 (AI技術、データ解析、VR) 	<ul style="list-style-type: none"> 2027年までに武州DX教育を受講したデジタル人材を20名育成する。 	DX推進委員会内のデジタル人材育成チームによる月度会議で進捗評価を行い、改善する。
④外部取引先との情報連携	<ul style="list-style-type: none"> 共通EDI検討・導入 外部取引先とのプラットフォーム構築 セキュリティ対策 	<ul style="list-style-type: none"> 2027年：完了 2027年：完了 2027年：完了 	DX推進委員会内の外部連携チームによる月度会議で進捗評価を行い、改善する。

※未利用生産能力とは、企業が持つ生産能力のうち、現在使用されていない部分を指します。具体的には、生産設備や人材が持つポテンシャルのうち、現時点で利用されていない部分を意味します。この未利用生産能力を有効に活用することで、企業は生産性を向上させ、コスト削減を図ることができます

社長によるDX推進メッセージ



武州工業は、1951年の設立以来、金属パイプ加工や板金加工を主な強みとして、ITや技術、ノウハウを活用しながら「**良い設計、良い流れ**」を追求し、ものづくり企業として事業を展開してきました。

日本のものづくり企業が経験した戦後の高度成長期やその後のバブル崩壊、リーマンショック、新型コロナウイルスの影響など、劇的な変化があった中でも、武州工業は国内のものづくり企業として存続してきました。これは、先代からの武州イムズをものづくりの現場で実現し、新しい技術を取り入れながら、社員と共に時代の変化に立ち向かってきたからだと考えています。

私は2020年に武州工業の3代目として会社を引き継ぎ、幹部メンバーと共に武州工業のデジタルトランスフォーメーション（DX）の方向性を考えました。3日間の宿泊合宿で徹底的に議論した結果、武州工業が目指すべきは『**モノづくりで社会の課題に挑戦し続ける企業**』であるという結論に至りました。

社会の課題とは何か、武州工業はそれにどう取り組むのかは、誰もやっていない未知の領域への挑戦であり、具現化です。大きなリスクを伴う挑戦ではありますが、これが武州工業の特徴であり、今後目指すべき姿だと信じています。

DX認定の更新に際し、これまでの取り組みに加え、デジタル技術やデータの活用をさらに深め、「**GKC（現場改善会計）**」による**経営変革**を推進していきます。

2025/03/18

武州工業株式会社

代表取締役社長 林 英徳



帳票2c-1

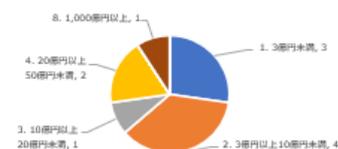
業種 **E. 製造業(素材)** 集計対象企業数 **11 件**

サマリ

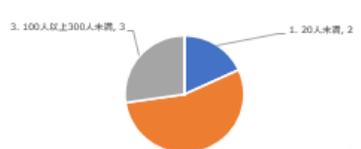
現在の平均値は、全体の平均値より低い
 DX推進の枠組みの全体平均との差は、**人材育成・確保、推進・サポート体制**が大きくマイナス。
 IT構築の枠組みの全体平均との差は、**IT資産の分析・評価、IT資産の仕分けとプランニング**がマイナス。
 目標の平均値は、3.28の全社戦略に基づく部門横断的推進のレベルで設定している。

回答内訳

売上規模別



従業員規模別



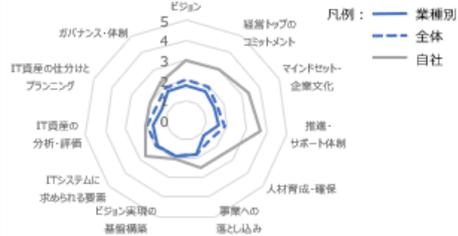
定性指標

現在

業種順位 **11 (位)**

平均成熟度 **1.59**

DX推進の枠組み (平均成熟度 1.54)



トップ	項目	成熟度	ワースト	項目	成熟度
1	事業への落とし込	2.2	1	事業部門の人材	0.8
2	持続力	2.1	2	技術を変ええる人材	0.9
3	体制	1.8			

ITシステム構築の枠組み (平均成熟度 1.65)

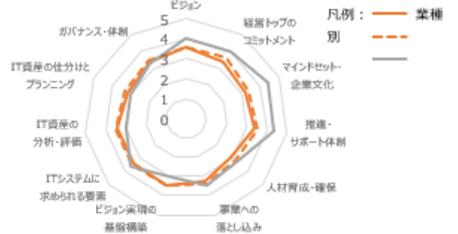
トップ	項目	成熟度	ワースト	項目	成熟度
1	全社最適	2.3	1	非競争領域の標	1.1
2	データ活用の人材	2.1			
3	アライバナー・資料	2.0			

目標

業種順位 **13 (位)**

平均成熟度 **3.28**

DX推進の枠組み (平均成熟度 3.23)

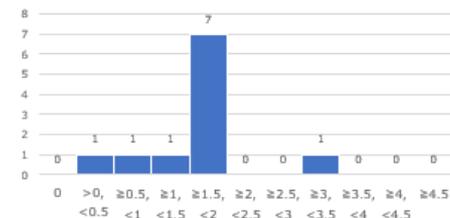


トップ	項目	成熟度	ワースト	項目	成熟度
1	危機感共有	3.6	1	事業部門の人材	2.6
1	事業への落とし込	3.6	1	技術を変ええる人材	2.6

ITシステム構築の枠組み (平均成熟度 3.34)

トップ	項目	成熟度	ワースト	項目	成熟度
1	全社最適	3.6	1	非競争領域の標	3.1

成熟度別回答分布



定呈指標

回答件数が多い指標

	回答件数	回答割合
デジタルサービスへの投資額	2	18%
デジタルサービスに従事している従	2	18%
新サービスを利用する既存顧客の	2	18%
DXのためのトライアルの数	2	18%
業務プロセスのデジタル化率	2	18%



帳票2e-1

従業員規模 3,100人以上300人未満

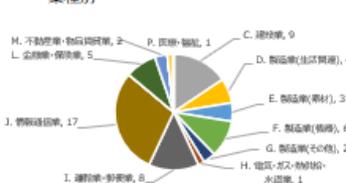
集計対象企業数 58 件

サマリ

現在の平均値は、全体の平均値より高い
DX推進の枠組みの全体平均との差は、**経営トップのコミットメントが大きくプラス**。
IT構築の枠組みの全体平均との差は、**IT資産の分析・評価、ビジョン実現の基盤構築がプラス**。
目標の平均値は、3.49の全社戦略に基づく部門横断的推進のレベルで設定している。

回答内訳

業種別

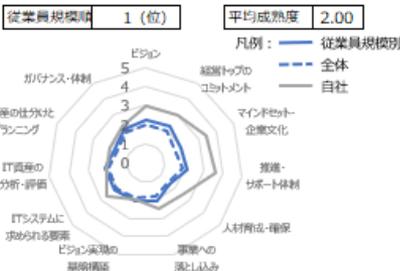


売上規模別



定性指標

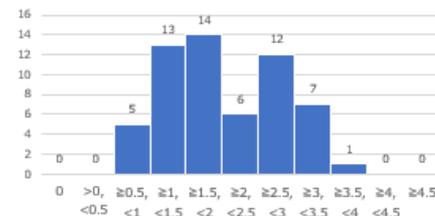
現在



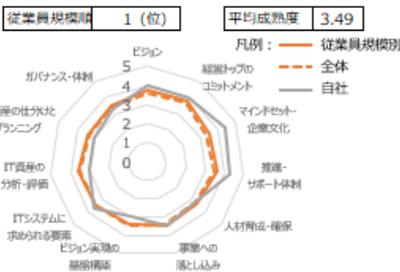
トップ	項目	成熟度	ワースト	項目	成熟度
1	事業への落とし込み	2.4	1	事業部門の人材	1.4
2	ビジョンの共有	2.4	2	技術を支える人材	1.5
3	経営トップのコミット	2.3			

トップ	項目	成熟度	ワースト	項目	成熟度
1	アライメント・方針	2.5	1	廃業	1.7
2	データ活用の人材	2.3	1	IT投資の評価	1.7
3	データ活用	2.2	3	競争領域の特定	1.7

成熟度別回答分布



目標



トップ	項目	成熟度	ワースト	項目	成熟度
1	ビジョンの共有	3.9	1	事業部門の人材	3.2
2	経営トップのコミット	3.8	2	技術を支える人材	3.2
3	事業への落とし込み	3.7	3	バリューチェーンワイ	3.3

トップ	項目	成熟度	ワースト	項目	成熟度
1	アライメント・方針	3.7	1	廃業	3.3
2	データ活用	3.6	2	競争領域の特定	3.3
3	全社最適	3.6	3	IT投資の評価	3.3

定量指標

回答件数が多い指標

	回答件数	回答割合
DX人材 (技術) の数	17	29%
DX人材 (事業) の数	16	28%
DX人材育成の研修予算	14	24%
データ精度	14	24%



SECURITY ACTION 2つ星宣言

2022.7.19 自己宣言ID 40090306255